

第二章 光る源氏の物語 紫の上追悼の夏物語

[第一段 花散里や中将の君らと和歌を詠み交わす]

夏の御方より(夏の町の御部屋様である花散里の御方から)、*御衣更(おんころもがへ、冬服に変わって)の御装束たてまつりたまふとて(の夏服を殿にお仕立て上げ奉って、四月一日の衣替えに際して次のように贈歌なさいます)、 *「御衣更」は注に<季節は衣更の季節、夏に移る。>とある。陰暦で言う夏は、四月、五月、六月。行事日程では四月一日が更衣の日と定められていたらしい。陰暦四月一日は今の太陽暦で五月初旬か。

「夏衣裁ち替へてける今日ばかり、古き思ひもすすみやはせぬ」(和歌 41-08)

「お見立て申しますものの、お気に召すかと気懸かりです」(意訳 41-08)

*注に<花散里から源氏への贈歌。「古き思ひ」について、『集成』は花散里自身とし、『完訳』は紫の上の思い出とする。>とある。「今日ばかり」の「ばかり」は<この日だけは>という限定意ではなく、区切りの行事に際しての<頃合い>の相応しさという情緒らしい。「夏衣」への<更衣>が題の歌筋での意味は「古き思ひ」は<冬服への別れ=春への別れ=紫の上との別れ>となりそう。また、紫の上の存命中は正妻として殿の主たる身の回りの手配を勤めていたのだから、夏の御方も夏服は用意して来たのだから、以前は副物だったのであり、「裁ち替へ=立ち替へ」は今や花散里の夏服が殿の主たる服となって、その意味でも紫の上への懐かしさが殿の「古き思ひ」を掻き立てるだろう、という花散里の思い遣りが示された歌なのだろう。「すすみやはせぬ」の「や」は反語ではなく疑問、それも、そのことで殿が心を痛めるのではないか、という懸念を示す花散里の労りや慰めだろうから、「古き思ひ」を<花散里自身>とする『集成』の見方には同意出来ない。

御返し(殿の御返歌は)、

「羽衣の薄きに変はる今日よりは、空蟬の世ぞいとど悲しき」(和歌 41-09)

「夏の薄着に替わったら、吹けば飛ぶよな身の軽さ」(意訳 41-09)

*注に<源氏の返歌。「衣」の語句を受けて返す。「薄き」「空蟬」は「羽衣」の縁語。「うつせみの」は「世」に係る枕詞。無常の世を嘆く。>とある。「うつせみ」は「現世身」で<この世に現に生きている人。転じて、この世。うつしみ。(大辞泉)>という意味の語が元々あって、是を「空蟬(セミの抜け殻)」に掛けた洒落語用が一般化したものの、らしい。ただ、「現し(うつし、形容詞：現然としている)」や「現(うつつ、名詞：現世、現実)」は現代語にも少しは引き継がれているが、その語感や語用に謂れ有り気な趣があるものの、仏典や中国古典に原典があるのかどうか、他の実感語と関連しているのか、などは手許の辞書などでは不明だ。

*祭の日(そして四月中旬の葵祭の日となったが)、いとおれづれにて(殿はとても見物気分になれずに)、「今日は物見るとて(今日は祭り見物で)、人びと心地よげならむかし(女房たちは浮かれていることだろう)」とて、御社のありさまなど思しやる(と言って、賀茂社の賑わいを思い浮かべなさいます)。 *「祭の日」は注に<四月中の酉の日の賀茂の祭(葵祭)の日。>とある。現在の観光行事としての、それでも祭事だが、賀茂祭・葵祭りは五月十五日と決められているようだが、大体はその頃と見て良

いのだろう。初夏の話題としての基調は変わらないものの場面は変わったのだから、現代語なら「さて」くらいの展開副詞が欲しい所だ。

「女房など、いかにさうざうしからむ(女房らはさぞ心待ちにしていることだろう)。里に*忍びて出でて見よかし(町に自由に出て見て来れば良い)」などのたまふ(などと仰います)。*「しのぶ」の此処での語用は<隠れる>の意ではなく、公然とした<行列仕立てではなしに>くらいの言い方で<各自勝手に>の意、かと思う。

*中将の君の、*東面にうたた寝したるを(中将の君は東廂でうたた寝をしているところを)、歩みおはして見たまへば(殿が歩いていらっしゃって御覧になると)、いとささやかにをかしきさまして、起き上がりたり(とても小柄で虚を突かれた慌てぶりも可愛らしく起き上がりました)。*「中将の君」は一章三段で「うなみ松」に例えられていたので、相当な若女房らしく、絵入り草子の転用画像らしき参照の挿絵を見ても、ずいぶん若そうに描かれていて、また源氏殿は蓄に手を付けたのかも知れない。いや勿論、女子にとっては光栄な事だ。*「ひんがしおもてにうたたねしたる」という場面設定には少し唐突感というか、今までには無かった展開の話運びに思える。女房がうたた寝をしている、というのは有り触れた日常の光景なのだろうか。其処に殿が居合わせる、というのは有り触れた、というか、よく有る事で容易に予見できる事、なのだろうか。うたた寝は、まだ青さが残る若女房が無防備に見せた可愛げなのか。無防備を装った計算なのか。こういう設定は全く以て作者の思うまま、自由勝手なワケで、読者は素直に受け入れる他は無いのだが、ただの一寸した思い付きでの設定にも思えないところが何とも気懸かりだ。

つらつきはなやかに(顔立ちは華やかで)、匂ひたる顔をもて隠して(明るい表情を隠すように)、すこし*ふくだみたる髪のかかりなど(少し寝乱れて髪が顔に掛かっているところが)、をかしげなり(風情があります)。*「ふくだむ」は<毛羽立つ→寝乱れてほつれる>あたりか。若い女の寝乱れ姿とは久しぶりの妖艶描写だ。祭りの狂気か。

紅の黄ばみたる気添ひたる袴(紅地に黄色掛かった光沢を帯びた袴に)、*萱草色の単衣(かんぞう色の着物に)、いと濃き鈍色に黒きなど(とても濃い灰色の中着と黒い上着を)、うるはしからず重なりて(堅苦しくなく重ね着して)、裳、唐衣も脱ぎすべしたりけるを(裳や唐衣などの装飾布を滑らせ脱いで脇に置いていたものを)、とかく引きかけなどするに(主人の御前なので威儀を正すべくあれこれと着飾ろうと身繕いしていたが)、*葵をかたはらに置きたりけるを寄りて取りたまひて(葵の葉茎を横に置いてあるのを殿が近付いて手に取りなさり)、*「萱草色(くわんざういろ)」は<色名の一つ。ユリ科カンゾウの花のような黄色がかった薄い橙色を表す伝統色。夏にユリのような姿の花を一日だけ咲かせる。とくにヤブカンゾウは、この花を見ると憂いを忘れるという中国の故事から、忘れ草ともよばれた。平安時代は忌事に用いる凶色であった。>とコトバンク講談社辞書にある。喪服の類らしい。「かんぞう色」は色見本でみるとダイダイ色、即ちオレンジ・ミカン色。*「葵をかたはらに置きたりける」は、中将の君が葵祭りの日なので童女あたりが持ってきた髪挿しの葵を側に置いていた、みたいなコトなのだろうか。それとも、作者は中将の君に何か思惑でも有るかのように描いているのだろうか。その辺は判然としないが、いかにも何かの前振りっぽさが目や鼻に付く仕掛けであり、何れにせよ、「中将の君」を童女っぽい幼さを残した女房像とは演出しているような設定だ。さて、その仕掛けられた撒き餌の「葵」だが、是は「あふひ」と旧仮名使いされ、既にこの物語中に於いても、よく和歌などに「逢ふ日(逢引)」との掛詞で詠み込まれたりしていた。当時としては常識というか普通の洒落語用だったらしい。序での雑感だが、当時との語感の違いと言えば、「あふひ」を現代語で発音すると<おうひ>か

<あうひ>かと思うが、当時は実際にはどのように発音していたのだろうか。「おうひ」よりは「あうひ」のほうが「あおい」に近いが、発声自体が現代とは違っていったような気もする。また、葵祭りでは髪挿しにする「葵」は、植物分類上はフタバアオイとのことでウマノスズクサ科の多年草。山地の木陰に生える。根茎は地をはい、2枚の心臓形の葉をつける。春、葉の間に、柄のある淡紅紫色の花を1個下向きに開く。京都の賀茂神社の神紋、徳川家の紋章としても知られる。かもあおい。あおいぐさ。ふたばぐさ。《季 夏》>と大辞泉にある。

「いかにとかや(何時だったっけ)。*この名こそ忘れにけれ(この草の名と同じ私たちの「逢ふ日」のことを忘れてしまっていたが)」とのたまへば(と仰ると)、*「この名」とは「葵」を手に行っているのだから、草の名のことのように見えるが、葵祭りの日に「葵」という草の名を忘れるのは変な話だと思って注を見ると源氏の詞。「葵」に「逢ふ日」を掛けていう。『集成』は「お前に逢うことも忘れてしまった、の意をこめる」と注す。>とあって、あっさり謎が解けた。こういう注釈は有難いし、尊敬できる。つまり、「この名」は「葵(あふひ)」を手にして「逢ふ日(情交した日)」のことを言う、という洒落っ気だ。だから、「いかにとかや」は「葵」という草の名を<何だったっけ>と聞いている体裁で、その実は<何時だったっけ>と最後に殿と中将の君が交わった「逢ふ日」を聞いている、というか、物を尋ねる態で誘い水に向けている、という実に凝った、その意味では一寸した名場面だ。だから、ネタバレ調の言い換えはやボだろうとは思うものの、意味が通るようにして置かないと気が済まないで、「逢ふ日」は補語する。

「さもこそはよるべの水に水草あめ、今日のかざしよ名さへ忘るる」(和歌 41-10)

「おかげでお茶も挽けました、今日ばかりは召し上がれ」(意識 41-10)

*注に<中将の君から源氏への贈歌。「よるべの水」は神に供える水。神霊のやどる水。「寄る辺」を掛ける。わたしに見向きもなさらないのはしかたのないこと、の意。>とある。「よるべの水」は<神前のかめにたたえられた水。神霊を寄せるためのものという。>と大辞泉にあり、「寄る瓶の水」と表記するらしい。賀茂祭に因んだ語用、らしい。「寄る辺」は古語辞典に<頼みとする所。身を寄せる所。>また<頼みとする配偶者。夫または妻。>とあり、女房の殿を頼る気持が込められている。と同時に、濡れ事が遠のいて「水」が波も立たない穏やかさが続いたので、「水草」が生えてしまった、という怨み節の歌筋らしい。「水草」は「みくさ」と読みがある。「みくさ」の音に何か掛けられているのかと思ったが、特には見当たらない。むしろ「みずくさ」の方が<水臭し>に掛かりそうだが、その語感「みくさ居」という言い方にも示されているのだろう。となると、「水草あめ」の「め」の当然意には相当な恨みが、無論演技の愛嬌として、込められている、と読むべきなのだろう。「め」は助動詞「む」の已然形だが、この已然形は「さもこそ」の「こそ」を受けて、理由項として順接で下に続いている。即ち、名もない「水草」が生えたので「今日のかざし」の<葵-あふひ-逢ふ日>の「名さへ忘るる」、という筋立て。尤も、「さもこそは」と殿の冗句を受けた時点で歌意は示されていて、後は何処まで気の利いた文句が言えるかが本題となっただけのはいるのだろう。で、その期待には十分応えている、とは、十分殿の劣情を刺激した句のようだ。発句の「さもこそは」は<正にその通りで、それが為に>という言い方だが、「その通り」とは<殿が忘れるのも当然なほど縁遠い>という意味だ。馴染みが寄り付かないのを怨む、というんじゃ、まるで女郎の客引きだが、殿に水を向けられた召人であれば当然の機転なのかも知れない。

と、*恥ぢらひて聞こゆ(と中将の君は恥らってお応え申します)。*「恥ぢらひて」も重要な演技だ。いや、演技だろうと自然体だろうと受身として誘う他は無い。

*げにと(殿は中将の君の応対に十分に納得して)、いとほしくて(その機転に大いにそそられて)、 *「げにと」は相当にイヤラシイ響きだ。殿は水向けに上手に応えた中将の君にとても満足して、その姿態に喚起された劣情を損なうこと無く、そのまま風情ある秘め事に及ぶことになる、という意味での<納得>だ。

「おほかたは思ひ捨ててし世なれども、葵はなほや摘みをかすべき」(和歌 41-11)

「大方カタは着いたけど、神輿の前じゃカタ無しだ」(意識 41-11)

*注に<源氏の返歌。「葵」は中将の君を喩える。「摘み」「罪」の掛詞。「葵」「罪」「犯す」は神事に関する縁語。>とある。「罪」「犯す」は背神というよりは背徳であり、仏心への背信なのではないか。また、服喪の対象である紫の上への後ろめたさは、殿にも女房にもあるのだろうが、それは殿の移り気が上に不安を与えることに対する気配りなのであって、もともと身分ある男の女遊びは女の誉れでも有り、文化的な豊かさも育てる楽しい経済刺激でもあって、基本的には社会的に容認ではなく推奨されている物で、上の身分に障る筈もない側女との女遊びは、上の存命中でも殿に背信という認識など有り得ない。その次元の話としては、女房の気持はもとより一顧だにされない。だから、この「罪」は「思ひ捨ててし世」という出家意志に障る、という歌筋だ。尤も、出家が信仰心に拠るものなら、「おほかたは」などという言い種は有り得ない。精力や胆力が落ちてきてください執着心が無くなった>というのは、加齢による普通の生活感であり、仏典の示す所を生活信条として<執着心を絶つ>なら、「おほかた」などという好い加減な姿勢は許されない。が、しかし、是は戯れ歌だ。「摘み」に「罪」を掛けた大喜利が笑えればそれで良い、という他愛無さ。これは始末が悪いのか、始末など考えないだらかさなのか。マ、一応、仏教を呑み込んだ日本神道の懐の深さ、と取って置く。ただ、祭りの日の邸内の人少なさにコトに及ぶ、というのは衛門督藤君が女三の宮に取り入る場面に似て、何処か祭りの狂気が漂う。

など(などと仏心も神前では一休みとばかりに)、一人ばかりをば思し放たぬ*けしきなり(この中将の君だけはお見捨てになれずに情交に及ぶという態なのでした)。 *「けしき」は<和合の図>を意味する。是を象形化するとポルノになる。が、「和」は<やまところ>であり、日本の核心を作者は巧まらずして主張しているのかも知れない。とまで言ったら、さすがにバカバカしい。

[第二段 五月雨の夜、夕霧来訪]

五月雨は(さみだれは、五月の長雨の日には)、いとど眺めくらしたまふより他のことなく(ますます長く暗く沈んで過ごしなされる他にすることもなく)、さうごうしきに(物寂しい所に)、十余日の月はなやかにさし出でたる雲間のめづらしきに(十日過ぎの月が明るく差し出た雲間も珍しいという日に)、大将の君御前にさぶらひたまふ(大将君が殿の御前で話し相手をなさいます)。

花橘の(花を付けた橘の木が)、月影にいときはやかに見ゆる薫りも(月の光にとてもくっきりと浮かんで香りも)、追風*なつかしければ(乗せる風に故人が偲ばれるので)、*千代を馴らせる声もせなむ(ずっと変わらずに花橘に慣れ親しんで来た声が聞きたい)、と待たるるほどに(とホトトギスの飛来が待たれるところに)、 *「なつかし」は古語では<親しめる、慕わしい>という語用が多く<偲ばれる>というのは現代語風なのかもしれないが、此処では<紫の上が偲ばれる>という意味なのだろう。「花橘」は古語辞典の参照語用に「さつき待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(古今集 139)とある。 *「千代を馴らせる声」は注に<『源氏積』は「色変へぬ花橘に時鳥千代をならせる声聞こゆなり」(後撰集夏、一八六、読人しらず)を指摘。>とある。「馴らせる」は分かり難い。「馴らふ(馴れる)」の連用形「馴らひ」に過去事実を示す

助動詞「せり」の連体形が付いた語で「慣れ親しんでいた」という意味だろうか。他に思い付かないので、そう解釈して置く。というのも、花橘とホトトギスの風情としての相性の良さは万葉集にも多く詠まれているらしく、それを今も変わらずに愛でる心を「色変へぬ」「千代」と言い表した、というのは分かり易いからだ。

にはかに立ち出づる村雲のけしき(急に立ち上る入道雲の雲行きが)、いとあやにくにて(何とも生憎で)、いとおどろおどろしう降り来る雨に添ひて(実に本降りの雨に加えて)、さと吹く風に灯籠も吹きまどはして(突風に灯籠の火も吹き消されて)、空暗き心地するに(真っ暗闇になった感じで)、

「*窓を打つ声」など、めづらしからぬ古言を、うち誦じたまへるも(「打窓声(だーそーしょー)」などと珍しくもない漢詩を殿が詠唱なさるのも)、折からにや(花橘にホトトギスの季節柄からか、一人で雨音を聞くのが悲しくて)、*妹が垣根におとなはせまほしき御声なり(紫の上を恋しがっているような御声なのでした)。*「窓を打つ声」は注に「『奥入』は「秋夜長、夜長無眠天不明、耿々残燈背壁影、蕭々暗夜雨打窓声」(白氏文集、上陽白髮人・和漢朗詠集、秋夜)を指摘。」とある。「上陽人」は大辞林に「唐の玄宗の時、楊貴妃に寵愛(ちようあい)を独占されて上陽宮に移され空しく老いた宮女たち。不遇な宮女。上陽宮の人。上陽の白髮人。」とある。詩情は、愛を失って空しく日を送る悲しさ、らしく、原詩は女心だろうが、源氏殿は自分の悲しさとして「窓打つ夜の雨」の冷たさを詠唱したようだ。ただ、五月は真夏で秋ではない。*「妹が垣根におとなはせまほしき」は注に「『異本紫明抄』は「一人して聞くは悲しきほととぎす妹が垣根におとなはせばや」(出典未詳)と指摘。『評釈』は「夕霧の心中であるが、夕霧は、源氏の求道生活に紫の上の影を見ている。それは作者の心でもあり、読者の心でもある」と注す。」とある。「妹が垣根(いもがかきね)」は「妻の家」。「おとなふ」は「音を立てる→聞かせる→訪れる」。「おとなはせまほしき」は「訪れて聞かせたい」。参照歌を下敷きに見立てるなら、ホトトギスの鳴声を雨音に置き換えれば、夫である源氏殿が紫の上と聞きたがっているように聞こえる詠唱だった、みたいなことだろうか。変に分かり難い。

「独り住みは(独り暮らしは)、ことに変ることなけれど(別に変わったことではないが)、あやしうさうざうしくこそありけれ(経験が無いので不安だ)。深き山住みせむにも(出家して深い山暮らしをするにも)、かくて身を*馴らはしたらむは(このように妻を失って独り寝に身を馴らして来たようなのは)、こよなう心澄みぬべきわぎなりけり(この上なく心の整理が着くことなのです)」などのたまひて(などと殿は大將君にお話しになって)、*「馴らはす」は「慣れさせる、習慣づける」。「たらむ」は完了の助動詞「たり」の未然形に推量表現の助動詞「む」が付いた語の連体形で「～して来たようなこと」。「馴らはしたらむ」は「馴らすようにして来たようなこと」。しかし、それにしても、「かくて身を馴らはしたらむ」は何のことを言っているのか分からない。御部屋様方へのお渡りが無い事を「女断ち」しているとも言い張る心算なのだろうか。女房に身の回りの世話をさせる生活で、中將の君を抱いたりもして、何処に「独り住み」の片鱗があるのか。紫の上を失って、女三の宮も出家している今、本妻を娶らずにいる、その気持こそが「独り住み」の本質だ、とでも言うのか。私は出家の何たるかなど分からないが、それでも儉しい修行生活の精神性と六条院の生活とでは、思索に根を詰めるのと文化様式の体現という両極端に位置するように見える。で、此処の文意は私には全く以て意味不明だ。が、息子の大将君相手に言う雑談としてなら成立するか。

「*女房(女房の誰か)、ここに(大将に)、くだものなど参らせよ(お菓子など差し上げなさい)。男ども召さむもことことしきほどなり(外に控える男たちに用意させるのも大仰だ)」などのたまふ(などと仰います)。*「女房」と実際に呼びかける事があったとしても驚くには値しないのかも知れないが、

女房は側に居て直接呼び掛けるのだろうから、普段なら「女房」という一般呼称ではなく「誰れか」くらいを使いそうな気がして、此处では「男ども」と区別するためにわざわざこういう言い方をしたような、やはり珍しい場面を感じる。「男ども」は室外または御簾外に控えているので、より手近く側に控える女房に直接呼び掛けて、仰々しい客人用の接待ではなしに、身内用の簡便な接待を言い付けた、みたいなことと読んで置く。

心には(しかし実際には)、ただ空を眺めたまふ御けしきの(上を失った空虚さに出家に向けての心の整理どころか、何一つと他事に焦点が定まっていらっしゃらないような殿の御様子が)、尽きせず心苦しければ(底知れずいたわしく)、「かくのみ思し紛れずは(これほどお忘れに成れないのでは)、御行ひにも心澄ましたまはむこと難くや(念仏行をするにも雑念を払うのが難しいだろう)」と、見たてまつりたまふ(と大將は源氏殿を拝察申しなさいます)。「心には」の「心」は<殿の心中>だが、「御心」のような尊称が無い。「御けしき」との重複を避けた簡便な語用なのだろうか。または、より本人の実感に即した言い方とも言えるのかもしれない。が、この文は下に「心澄ましたまはむこと難くや」と大將は見立てた、とあるのだから、この「心には」は殿の「こよなう心澄みぬべきわざなりけり」という言葉とは裏腹に<その実、内心では>という副詞語用と読むのが文脈に合う。

「ほのかに見し御面影だに忘れがたし(嵐の日に少し垣間見た紫の上の面影でさえ忘れがたいのだから)。ましてことわりぞかし(まして、連れ添った父上がお忘れに成れ無いのは、無理もない)」と、思ひゐたまへり(と大將は思っていらっしゃいました)。

[第三段 ほととぎすの鳴き声に故人を偲ぶ]

「昨日今日と思ひたまふるほどに(上のご逝去を昨日の事のように思っております内に)、*御果てもやうやう近うなりはべりにけり(御一周忌も次第に近付いてまいりました)。いかやうにかおきて思しめすらむ(御法要にどのようななさるお積もりでしょうか)」 *「御果て」は<御忌明け>のことで、四十九日や一周忌を言うらしい。此处では<御一周忌>とのこと。

と申したまへば(と大將がお聞きなされると)、

「何ばかり(何ほども)、世の常ならぬことをかはものせむ(世間並みと違う事は考えていない)。かの心ざしおかれたる極楽の曼陀羅など(上が望みとしていた極楽の曼荼羅絵なども)、このたびなむ供養すべき(今回は奉納供養したい)。経などもあまたありけるを(浄土信仰の写経なども上が多くしてあったようだが)、なにがし僧都(指導していた僧都が)、皆その心くはしく聞きおきたなれば(皆その旨は詳しく聞き置いているので)、また加へてすべきことどもも(他に加えるべき法要も)、かの僧都の言はむに従ひてなむものすべき(その僧都の進言に従って行なうものとするべきだろう)」などのたまふ(などと殿はお応えになります)。

「かやうのこと(そのような法要のご用意を)、もとよりとりたてて思しおきてけるは(生前から紫の上が特にお考えなさっていたことは)、うしろやすきわざなれど(準備のよろしい事です)、この世にはかりそめの御契りなりけりと*見たまふには(今生では短い御夫婦縁だったと故上がお考えなら)、形見といふばかりとどめきこえたまへる人だにものしたまはぬこそ(形見となる子宝にだけは恵まれなさらなかったのが)、口惜しうはべれ(残念です)」 *「見たまふ」の主語については、注に『完訳』は「本文のままでは源氏が主語。「見たまふるには」と謙讓語の誤りとして、夕霧と解

すべきか」と注す。諸本異同ナシ。よって、源氏として解す。>とある。しかし、「見たまふ」を殿の主語と取るのは私には違和感がある。目上の話し相手の見解を推量して、それに基づいて論を展開する時は安易な挿入の文型は避けて、事改めた構文で語るべきもののように思う。この口語括弧文自体は大将源君の発言で、基本的には故上の言動に対する源君自身の印象を語っている構文であり、「見たまふには」の「には」は<～という限りに於いては=ということなら>という条件項になっているようだが、その限りでは、「見たまふ」は大将が主語の丁寧語でも文意は成立するようにも見えるほどだが、「かりそめの御契りなりけり」の「けり」という回想意には「見たまふ」た人自身の述懐が示されている言い方に見えて、ということは、この「見たまふ」の主語は紫の上のように私には見える。それは文法上で成立し得ないのだろうか。「見たまふ」が過去形の「見たまへる」でないのは、「この世には」と<現世>を事割っているので、御霊の現存を前提にした言い方と見れば整合するのではないか。下にも「ものしたまはぬこそ」という現在形語用があり、是の主語が殿ではなく故上であることは「口惜しうはべれ」と源君が、殿の心情への推察としてではなく、自身の感慨を示す対象として語っていることで示されている。

と申したまへば(と源君が申しなさると)、

「*それは(上と私との縁は)、仮ならず(はかないものではない)。命長き人びとにも(長命な御方がたにも)、さやうなることのおほかた少なかりける(子宝は概して少ない)。みづからの口惜しさにこそ(私の方に子種が無いのだ)。そこにこそは(そなたこそ)、門は広げたまはめ(子宝を多く儲けて、家門を盛んになさい)」などのたまふ(などと殿はおっしゃいます)。*「それ」は源君が言った「この世にはかりそめの御契りなりけりと見たまふ」という仮定項を指すのだろう。そして殿は「それ」を「仮ならず(かりそめのものではない)」と反論した。「それ」という客観視の言い方は、やはり「見たまふ」が紫の上の見解だという仮定文であることを示しているように見える。「それは仮ならず」には客観反論の落ち着いた響きがあり、自身についての否認や否定という強い反論の言い方ではない気がする。

何ごとにつけても(上亡き後は何をするにつけても)、忍びがたき御心弱さの*つつましくて(悲しみを隠せない気の弱さを人に見せたくない)、過ぎにしこといたうものたまひ出でぬに(故人の思い出も余り口に出されないが)、*待たれつる山ほととぎすのほのかにうち鳴きたるも(この夏の夜の風情に待たれていた山ホトトギスが遠くで鳴いているのも)、「*いかに知りてか(どうして上が恋しい私の気持をホトトギスは知っているのか)」と、*聞く人ただならず(と殿は感傷に浸ります)。*「つつまし」は<気が引ける>。包みたい、隠したい、みたいな消極的な気持らしい。*「待たれつる」は語り口としては二段冒頭の「花橘の月影にいときはやかに見ゆる薫りも追風なつかしければ、千代を馴らせる声もせなむ、と待たるるほどに」を受けていて、その下敷きとされた<「色変へぬ花橘に時鳥千代をならせる声聞こゆなり」(後撰集夏、一八六、読人しらず)>から、「時鳥(ほととぎす)」を洒落口調で引き出している、ということらしい。で、ホトトギスは夜鳴き鳥で<冥土の鳥>とも考えられていたとのことで<黄泉の上からの遣い>に見立てた風情なのだろう。*「いかに知りてか」は注に<『源氏積』は「いにしへのこと語らへばほととぎすいかに知りてか古声のする」(古今六帖五、物語)を指摘。>とある。*「聞く人ただならず」は注に<『完訳』は「源氏のこと」と注す。敬語抜き客観的叙述。>とある。源氏殿も画中に含めた情景描写の趣だろう。

「亡き人を偲ぶる宵の村雨に、濡れてや来つる山ほととぎす」(和歌 41-12)

「濡れ来つる 山の村雨 ほととぎす」(意識 41-12)

*注に＜源氏の詠歌。『完訳』は「前の引歌（「いかに知りてか」）をとらえ返す発想。ほととぎすは現世と冥土を往来する鳥。それを濡らす「むら雨」に、故人を思う源氏の涙を象徴」と注す。『評釈』は「大空は恋しき人の形見かはもの思ふごとに眺めらるらむ」（古今集恋四、七四三、酒井人真）を指摘。＞とある。しかし、此処まで絵画的に引いて描くと、妻を失った肉声からは離れて余りに情緒美に煙る感じだ。

とて(と殿は詠んで)、いとど空を眺めたまふ(ずっと空を眺めなさいます)。

大将(源君はこう唱和なさいます)、

「ほととぎす君につてなむ、ふるさとの花橘は今ぞ盛りと」（和歌 41-13）

「ほととぎす 花橘の ふるさとぞ」（意識 41-13）

*注に＜夕霧の唱和歌。「君」は紫の上をさす。『休聞抄』は「亡き人の宿に通はばほととぎすかけてねにのみ鳴くと告げなむ」（古今集哀傷、八五五、読人しらず）。『源氏物語事典』は「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（古今集夏、一三九、読人しらず）を指摘。＞とある。六条院を「ふるさと」と詠むところが殿への慰めなのだろう。それと＜君に伝えたい、ふるさとの花橘は今が盛りだと＞なんて何だか、まるで今の歌謡曲みたいで、妙に新しく響いて変な感じだ。

女房など(女房たちも)、多く言ひ集めたれど(多く唱和歌を詠み集めたが)、とどめつ(賑わいの趣きの場でも無いので、列挙は止めます)。

大将の君は、やがて御宿直にさぶらひたまふ(源君はそのまま殿のお部屋に泊まって近くにいらっしゃいます)。寂しき御一人寝の心苦しければ(殿の寂しい独り寝が気懸かりなので)、時々かやうにさぶらひたまふに(時々このように宿泊なさるが)、*おはせし世は(上のご存命中は)、いと気遠かりし御座のあたりの(とても敬遠された殿の御寝所近くの)、いたうも立ち離れぬなどにつけても(然程遠くない所で横になるにつけても)、思ひ出でらるることも多かり(故上が思い出されることも多かったのです)。*「おはせし世は」は注に＜紫の上の在世中は。＞とある。

[第四段 蛍の飛ぶ姿に故人を偲ぶ]

*いと暑きころ(梅雨が明けた六月の暑い日に)、*涼しき方にて眺めたまふに(殿は釣殿で涼んでいらっしゃったが)、池の蓮の盛りなるを見たまふに(池の蓮が花盛りなのを御覧になっても、極楽浄土が思われて)、*「いかに多かる(何と多く咲いていること)」など、まづ思し出でらるるに(などと故上を失った悲しみが先ず思い出されるので)、ほれぼれしくて(茫然として)、つくづくとおはするほどに(一点を見つめていらっしゃるうちに)、日も暮れにけり(日も暮れてしまいました)。*「いと暑きころ」は注に＜『集成』は「盛夏。旧暦六月である」と注す。梅雨が明けて暑い日々となる。＞とある。今の太陽暦で七月下旬あたり。従う。*「涼しき方」は＜東の釣殿＞だろう。常夏巻冒頭に「いと暑き日、東の釣殿に出でたまひて涼みたまふ」とあった。十六年前の源氏殿 36 歳の時の話で、相伴していた源君は中将で 15 歳だった。*「いかに多かる」は注に＜『源氏積』は「悲しさぞまさりにまさる人の身にいかに多かる涙なるらむ」（古今六帖四-2479、悲しび、伊勢）を指摘。＞とある。「多かる」が＜涙＞だと知るには必脚だが、この引歌と「池の蓮の盛り」との関係は分からない。少し検索したが、まあ、「悲しさぞまさりにまさる人の身に」が故人を

偲んでのことなのだろうと推測するばかりだ。「蓮(はちす)」は極楽浄土で阿弥陀仏が座す蓮華の座を言う蓮の台(はちすのうてな)のことなので、一般的に<故人を偲ぶ>に繋がる話になるのだろう。

ひぐらしの声はなやかなるに(ヒグラシの声がうるさい中で)、御前の撫子の夕映えを(庭先の撫子が夕日に映えている風情豊かさを)、一人のみ見たまふは(一人きりで御覧になるのは)、げにぞかひなかりける(全く張り合いの無いことでした)。

「つれづれとわが泣き暮らす夏の日を、かことがましき虫の声かな」(和歌 41-14)

「一人寂しい夏の日に、ただやかましい虫の声」(意識 41-14)

蛍のいと多う飛び交ふも(蛍がとても多く飛び交う庭にも)、「*夕殿に蛍飛んで(夕方の宮殿に蛍が飛んでも共に愉しむ相手が居なくては空しい)」と、例の、古事も(といつも引用する白居易の古詩も)かかる筋にのみ口馴れたまへり(そうした悲恋の場面だけを朗詠なさいます)。 *「夕殿に蛍飛んで」は注に<『源氏積』は「夕殿に蛍飛んで思ひ悄然たり」(白氏文集・長恨歌、和漢朗詠集)を指摘。>とある。出展参照には<「夕殿蛍飛思悄然 秋灯挑尽未能眠」(白氏文集十二-五九六「長恨歌」)>とある。「長恨歌(ちょうごんか)」は<中国の長編の七言古詩。唐の白居易(はくきよい)作。平安時代の初期(八〇六)成立。遣唐使が日本に伝えた。〔内容〕百二十句から成る七言の叙事詩(じよじし)で、唐の玄宗(げんそう)皇帝と楊貴妃(ようきひ)のロマンスの物語である。『源氏物語』をはじめ日本の文学に大きな影響を及ぼした。>とウェブリオ辞典サイトの「学研全訳古語辞典」にある。引用部分はその67句で、戦争に大敗を喫し妃とも死別した失意の王が好日を思い憔悴するさま、を語る場面らしい。

「夜を知る蛍を見ても悲しきは、時ぞともなき思ひなりけり」(和歌 41-15)

「夜を彩る蛍にも、昼の涙が止まらない」(意識 41-15)

*注に<源氏の独詠歌。『河海抄』は「兼葭水暗うして蛍夜を知る(兼葭水暗蛍夜知)楊柳風高うして雁秋を送る(楊柳風高雁送秋)」(和漢朗詠集上-一八七、蛍、許渾)を指摘。>とある。「兼葭」は大辞林に「けんか」との読みで<オギとアシ。共に水辺に生える草。>とある。「楊柳(ようりゅう)」は<ヤナギ。「楊」はカワヤナギ、「柳」はシダレヤナギ>とある。「兼葭水暗蛍夜知」は<水草の暗闇で蛍が夜を知る>のではなく、暗闇が蛍夜(けいや)を知らせる、とは即ち<水辺の草むらの暗さに蛍の光が際立つ>ということらしく、「蛍雪(けいせつ)」が<苦学>を意味するのとは違って、「蛍夜」という語用は、気負って言えば、情景の真髄は野生の命の輝きだ、みたいな主旨だろう。そういう詩心なら「楊柳風高雁送秋」は<雁が秋を届ける>のではなく、普段は柳を優しく靡かせる風が荒れて(風高)、雁の群れが渡る(雁送)のが秋の知らせ、という意味で<柳風高く雁送の秋>と読み下すべきなのではないか。こちら、「柳風」と「送秋」が<柳眉>と<秋波>の姿態とは異なる語用を強く印象付ける。ともあれ、「夜を知る蛍」は<夏の夜を引き立てる蛍>という意味だ。